

AIを活用した学生によるコンテンツ生成・発信型外国語教育モデルの構築と地域活性化への展開

【代表者】 王 欣 島根大学 外国語教育センター 特任講師

【研究の目的と内容】

本研究は、「AIを活用した学生によるコンテンツ生成・発信型外国語教育モデル」の構築に向けて、初級中国語教育において、学習者が中国文化への理解を深めながら、その内容を自ら整理・表現・発信する学習活動の可能性を検討することを目的とした。従来の中国語教育における文化学習では、説明を聞いて理解することにとどまりやすい面があるが、本研究では、生成 AI の活用を、語彙学習や翻訳補助にとどめるのではなく、文化内容を自分の言葉やイメージで捉え直し、表現へとつなげるための手段として位置づけた。

具体的には、以下の実践を行った。

1. 七夕を題材とした授業実践

中国と日本の七夕の違いや特徴を学んだうえで、学生が画像生成 AI や動画編集ツールを用いて約 3 分程度の動画を制作する活動を行った。学生は、物語の内容や場面構成、人物像、雰囲気などについて自ら考え、それを AI に伝え、生成結果を見ながら表現を調整していった。この過程を通して、文化内容を単に理解するだけでなく、自分なりに整理し、再構成しながら表現へとつなげていく学習の可能性を検討した。これは、申請時に構想した「学生によるコンテンツ生成・発信型外国語教育モデル」を、中国文化理解の授業実践として具体化する試みでもある。

2. 春節文化を題材としたデジタル賀状制作

授業外では、春節文化を題材としたデジタル賀状制作の企画も行った。学習者は、中国の春節に見られる祝福の表し方や視覚的な特徴を参考にしながら、どのような画面や雰囲気を表したいかを考え、そのイメージを AI との対話を通して具体化した。さらに、中国語で祝福の言葉を書き添えることで、文字と画面の両面から祝意を表す活動となった。

これらの実践を通して、生成 AI が文化理解と表現活動を結びつける学習支援の手段となり得るかを検討した。

【研究の成果(本研究によって得られた知見、成果、論文、学会発表、外部資金への応募見込み等)】

1. 教育実践を通じて得られた知見

本研究では、生成 AI を活用した中国文化理解の授業実践を通じて、学生の学習活動が、説明を聞いて理解する段階から、自ら調べ、考え、生成し、再構成し、発信する方向へと広がることを確認した。特に、AI を媒介として動画制作やデジタル賀状制作に取り組むことで、学生が中国文化を単に覚える対象としてではなく、自ら表現し、他者に伝える対象として捉える可能性が示された。これは、初修外国語教育において、文化理解と表現活動を結びつける学習デザインの有効性を示唆するものである。

2. 学会発表

2025(第 21 回)ChinaCALL Conference(2025 年 9 月 19 日～21 日、中国・南京)において、口頭発表「Enhancing Japanese University Students' Understanding of Chinese Culture through AI-Powered Methods」を行い、本研究の授業実践と教育的示唆を国際学会で報告した。

3. 論文成果

島根大学外国語教育センタージャーナル第 21 巻(2026 年 3 月)に、「生成 AI を活用した中国文化理解支援と生成的学習プロセスの検討——『知識受容』から『文化的共創』への転換を目指した授業実践」(pp.53-65)を掲

載し、研究成果を論文化した。学会発表段階の実践知を整理・再検討し、授業設計、学習者の反応、AI 活用の意義と課題を学術的にまとめた。

4. 社会発信と企画実践

中国の春節期には、【新春企画】「AI で描く 2026 年・午年ワークショップ」を企画・公開した。本企画は、AI 技術を用いて中国の友人に贈るデジタル賀状を制作する創作型イベントであり、参加者が春休み中に自宅から自分のペースで取り組める形式とした。授業実践で得た知見を、授業外の文化理解・表現活動へと展開した点に意義がある。

5. 今後の展望

本研究で得られた成果は、中国語教育にとどまらず、初修外国語教育における文化理解と表現活動を結びつける学習モデルとして発展可能である。今後は、他言語教育への応用や、地域文化発信との接続可能性についても検討していきたい。加えて、本研究で得られた知見と実践成果を基盤として、2025 年 8 月には科研費・挑戦的研究(萌芽)に「地域と世界を結ぶ地方大学生主体の外国語発信教育モデルの構築と波及可能性の検証」という題目で申請を行った。現在は審査結果を待っている段階にあり、本助成による取り組みが、今後の継続的な研究発展へとつながることが期待される。